

追悼の辞

法学部・大学院法学研究科教授・岡寄修先生は、病気ご療養中のところ、2019年4月にご逝去なされました。享年69歳でした。深夜、大友克之学長からのショートメールにより、岡寄先生ご逝去の連絡を受けたときの衝撃をいまでも私は忘れることができません。

この後でも触れますが、岡寄先生は、病気療養中も真摯に研究に取り組まれただけでなく、教育に対しても、熱い情熱を持たれておりましたので、法学部教職員一同は、岡寄先生が病を克服され、現場に復帰されることを強く望んでおりました。また、朝日大学法学会としても、本号を岡寄先生の古稀記念祝賀号にすべく計画していたところで御座いましたので、追悼号になってしまったことが残念でなりません。

岡寄先生の略歴について、簡単に振り返っておきます。岡寄先生は、1949年に東京都中野区でご出生され、1668年に東京都立富士高等学校卒業後、明治大学法学部に進学され、1974年にご卒業されております。ご卒業後は、いったんトヨタ東京カローラ株式会社にご就職されたものの、研究を継続したいとの思いで、1976年に明治大学大学院法学研究科に進学され、法哲学者であり、詩人でもあった立石龍彦先生に師事され、本格的に法哲学・法思想史の研究に入られました。1985年に明治大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学後、明治大学教務助手補、および自由が丘産能短期大学、明治大学、駒澤大学、東洋英和女学院大学等において非常勤講師を経られ、2008年より、朝日大学法学部に法哲学・法思想史担当の専任講師として着任されました。その後、2010年に准教授にご昇任され、2013年より、大学院法学研究科博士前期課程において、基礎法をご担当されることになり、さらに2017年より、法学部・大学院法学研究科教授にご昇任されました。

岡寄先生は、「リアリズム法学の出現とその背景」明治大学大学院紀要18号（1981年）を皮きりに定期的に研究業績を公表され、朝日大学

法学論集にもほぼ毎号、ご投稿頂くなど、生涯において30編にも及ぶ学術論文を示されました。何より、岡嵯先生の研究成果を語るうえにおいて外せないのが、ご高著『レッセ・フェールとプラグマティズム法学 -19世紀アメリカにおける法と社会』（成文堂・2013年）であります。はしがきにも御座いますように、「大学に入り法解釈学の勉強をしているうちに、アメリカのリーガル・リアリズムの動きに触れ、そこから、法解釈の何たるかを解明しようとする法哲学の法に大きな関心を持つようになった」と法哲学・法思想史研究に入ったきっかけを示され、その後、「19世紀における進化思想の歴史を研究する中で、時代を少々遡るだけで今の常識がほとんど通用しない『別世界』があることを覗き見ることになり、違った視点に立てば、それまで見えなかったものが現れ、見えていた風景がまったく違った様相を呈してくることに大きな興味を持つようになった」と記されておられることから明らかなように、立石先生の指導が岡嵯先生の研究スタイルに強く反映されていることが窺えます。本書は、19世紀のアメリカにおける司法主義の発展を支えたとされるレッセ・フェールの経済思想がアメリカに与えた影響とこれに批判的であったプラグマティストが法学の面で如何に反撃を試みたかが丹念に論証されており、当該研究テーマの先駆的役割を果たしているといっても過言ではないと思われます。

また、英米における法哲学・法思想史研究において、主に「正義」概念議論の前提が、英米近代社会における基盤上に存在しているものの、私は、「日本社会も英米と同様にこれを前提とすることに疑問を抱き、わが国が如何なる意味において英米風の近代社会といえるかを探求したい」と岡嵯先生は常に語られており、今後、この点が明確に示されていくであろうと期待されていただけに学界に与える損失は大きいものであったといえます。

最後のご論稿となった「法学をめぐる議論と経験」『正義論の現代的展開』（朝日大学法制研究所・2019年）は、ご逝去される2ヵ月半ほど

前に病床から提出されたと聞いております。岡寄先生は、病と戦いながらも、生涯、研究者であり続けることを強く望まれていたのでしょうか。

なお、学術論文だけでなく、岡寄先生は、学生向けに法学会が発行する法のいぶき32号（2018年）において、「時代の変化を視野に入れよう」と題し、法学部生や法学部進学を念頭においている高校生等に向けて、「法を学ぶ場合には、……社会の技術の変化を視野に入れることが求められます。それは、法の知識を身に着けるには、時代の変化や文化の違い等を見据えながら、眼前で起きているトラブルを解決するというバランス感覚が欠かせないからです」と法を学ぶ意義を語られています。法律学を教示する立場として、如何なる視点が重要であることを示されたかったのでありましょう。岡寄先生が、朝日大学法学部・大学院法学研究科において育成されたかった人材象がここから窺えます。

私たち法学部教職員一同は、岡寄先生に今後もさらにご指導を仰ぎたいと願っていたため非常に悔やまれますが、他の誰より岡寄先生ご自身、研究・教育継続の気持ちが強かっただけに無念であったに違いありません。私ども法学部教職員一同は、岡寄先生のご遺志を受け継ぎ、朝日大学法学部・大学院法学研究科発展のために、今後、さらに研鑽していくことを誓います。

このような趣旨から、岡寄先生に感謝・追悼の意を表すべく、本誌を追悼号として献呈申し上げる運びとなりました。謹んで岡寄先生のご遺徳を偲び、ご冥福をお祈り致します。

法学部長・大学院法学研究科長・法学会長 大野 正博